

# 陶芸家

池田 正さん

池田 正さん(69)は九州の出身で、幼いころから有田焼に親しんで育ちました。高校生の時に学校の授業で陶芸の基礎を学び、卒業後は陶器の絵付けや卸しの営業をして、五十年以上もの長い間、陶器に接し続けてきました。

いつかは自分で制作したいという思いを持っていた池田さんは平成九年にその夢を実現。「ななめ通り」沿

いにある旧タマネギ倉庫を借りて「まるくら」(北二二東二三)を開業しました。

ここで作られる陶器の主な納入先は飲食店やホテルなどで、池田さんは実際にお店を見て、雰囲気にあった陶器を作るそうです。数多くの陶器を見つけてきた確かな目が、店内にじっくりなじむ、世界に一つしかない作品を生み出します。

池田さんの陶器作りは、三十八種類もの土の中から、用途やイメージに合った土を選ぶところから始まります。土をこね、ろくろで形を作り、焼いてから上絵付けをして、陶器が完成するまでには、半月ほどか

かるといいます。

「何もないところから形のあるものができるのが陶芸の魅力。焼き上がりが予想と全く違うこともあり、思い通りにいかないところがまた面白い」と話す池田さん。陶芸の奥の深さは、池田さんを引き付けてやまないようです。

「まるくら」の陶器は一つ一つを手作りしているため、大量生産ができません。「工場で作られた陶器の方がずっと安いですよ」という池田さんですが、独特の曲線と鮮やかな彩色が印象的な池田さんの作品には、量産品にはない、手のぬくもりが感じられます。



ろくろで形を作るのが一番難しい作業。ちょっとした加減で全く違う雰囲気になるそうです。池田さんも真剣な表情に



絵付けは下書きなしで一気に描き上げます。右は池田さんの作品。どれも色鮮やかで、なだらかな曲線を持っています



## 職人技に挑戦!

「まるくら」で、陶器の絵付けを体験させていただきました。

「自分の好きな絵を好きなように描いていいですよ」と言われ、絵筆に絵の具を付けたまま真っ白なお茶わんとにらめっこしている池田さんが、お手本に桜の絵を描いてくださいました。

「花はこんな感じ、葉っぱはこう」と、簡単そうに描く姿に励まされ、思い切った筆を入れてみましたが、丸いお茶わんの上では筆が思うように動きません。直径十一センチほどのご飯茶わんに絵付けを終えたころには、すっかり肩が凝ってしまいました。



上は当区の職員が池田さんの指導のもと絵付けをしたご飯茶わん。曲面に絵を描くのは想像以上に難しい作業でした。近くで見ると、ところどころに色むらがあります

下は取材の際に池田さんが絵付けをした絵皿。下書きがなくても「頭の中に絵が入ってるんだ」とのこと

